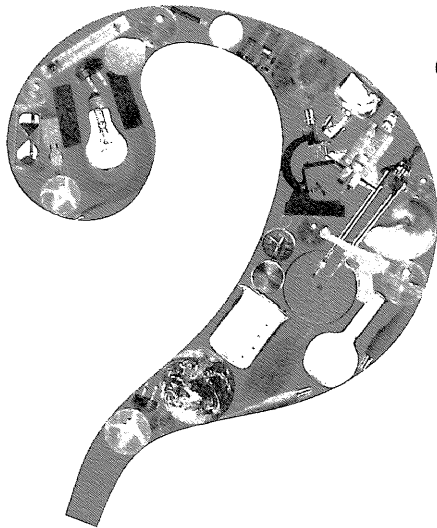


406
kay6
①①

もっと知りたい！ 科学の芽の世界

ノーベル賞への
夢を紡ぐ



寄贈
筑波大学
出版会

筑波大学出版会

監修 筑波大学学長 岩崎 洋一
「科学の芽」賞実行委員会 編

08007672

はじめに

ふしぎだと思うこと
これが科学の芽です
よく観察してたしかめ
そして考えること
これが科学の茎です
そうして最後になぞがとける
これが科学の花です

この言葉は、1974（昭和49）年に行われた、湯川秀樹・朝永振一郎・江崎玲於奈の3氏による座談会の際に、朝永先生が子どもたちに向けて書かれた色紙の言葉です。「科学の芽」賞という名は、ここから取ったものです。

「科学の花」を咲かせる、すなわち何か素晴らしい発見や新しい理論を作り上げるためには、まず「ふしぎ」だと思うこと、そして次にていねいに観察して確かめるとともにじっくり考えること、こうした過程を経て初めて謎が解けて、花開かせるものであるということです。最初に「ふしぎ」を感じるかどうか、これがとても大切です。

普段から豊かに自然と接していること、既成概念にとらわれずに自由な感性を持っていることが必要でしょう。これが「科学の芽」を発見することになります。若い青少年のみなさんは、大人より知識量は少ないけれど、「ふしぎ」と感じる心を持っています。このことが、「科学の花」を咲かせる上でとても大切なことなのです。

ところが、最近の現実には、「理科ぎらい」「科学ばなれ」が進んでいるようです。日常生活で自然の中で遊ぶことが減っていたり、じっくり観察したり、実験して確かめたりする機会が減っていることが原因でしょう。また、「理科」が暗記教科のように扱われていたり、自然科学を幅広く学んでいなかったりと、大変不幸な事態が進行しているように思います。私自身、物理学を専門とする人間ですので、この状況を何とかしたいと考えてきました。

筑波大学では、2006（平成18）年に朝永先生の生誕100年を記念して、「朝永振一郎博士生誕100年記念事業」に精力的に取り組みました。また、その一環として、青少年向けの企画に「朝永振一郎記念『科学の芽』賞」を始めました。21世紀の世界や日本の将来を考えたときに、青少年の皆さんが一人でも多く朝永先生のような人物に育ってほしいと考えたからです。

朝永振一郎先生（1906～79）は、湯川秀樹先生に続いて、日本で2番目にノーベル賞（物理学）を受賞した方です。第2次世界大戦中から戦後の困難な時代に研究を続けて、素粒子を記述する場の理論とアインシュタインの相対性理論の関係を明確にとらえる「超多時間理論」を、さらにこの理論を発展させて、場の理論の無限大の困難を解決する「くりこみ理論」を発表しました。先生の業績は、21世紀の今日の自然科学においても重要な役割を果たしています。

朝永先生は、筑波大学と大変深い関係にあります。朝永先生は、1941（昭和16）年に筑波大学の前身、東京文理科大学教授に就任、のちの東京教育大学において学長（1956～62）もなさっています。1969年に定年退官されるまで、同大学教授、附属光学研究所長を務めています。

青少年の皆さんが、『もっと知りたい！「科学の芽」の世界』を読んで、「自分も『科学の芽』賞に応募しよう」と考えてくれると大変うれしく思います。

なお、筑波大学の大学会館にある「筑波大学ギャラリー」には、本学にゆかりのあるノーベル賞受賞者、朝永振一郎博士、白川英樹博士、江崎玲於奈博士の展示がありますので、ぜひ一度ご覧になってください。

筑波大学学長

岩 崎 洋 一